

# 理学系研究科長（理学部長）と理学部職員組合との交渉

1994年3月25日、4月18日、5月30日、6月27日、7月25日、9月22日、10月17日、11月21日、12月20日、1995年1月24日、2月20日、3月22日に、小林研究科長・三浦事務長と理学部職員組合（理職）との、同4月17日、5月22日、6月19日、7月17日、9月18日、10月30日、11月20日、12月18日、1996年1月22日、2月27日に、益田研究科長・柚原事務長と理職との定例研究科長交渉が行なわれた。主な内容は以下の通りである。

## 1. 職員の昇級・昇格について

### 〈事務職員〉

理職は、93年5月に昇格基準を満たした物理事務室主任1名の4級昇格を93年7月に取り上げて以来引き続いて要求し、94年4月1日付で4級昇格が実現した。また94年3月の交渉で理職が要求した地学科事務室主任の生物化学科事務主任昇任も同年4月1日付で実現した。これらの昇任昇格実現に理職は理学部の努力を多とした。さらに理職は在級年数以外の基準を満たしている化学科事務主任の5級昇格を要望し（94年5月）、同年4月1日付で実現した。この問題に関して理職は、文部省の5級昇格基準が50才以上の者は在級10年（50才未満の者は在級7年）となっているのは納得できないとして、少なくとも50才以上の者には事務主任昇任と5級昇格を同時発令すべきだと主張、改善を要求した（94年5月）。4級在級期間が長く94年度に55才で5級昇格した生物学科事務主任（95年4月より生物科学科）の6級昇格についても、95年の昇級延伸前の実現を要求した（94年10、11月）。

理職は94年3月以来ほぼ毎回の交渉において、教室系事務職員の5級昇格改善の方策として、全専攻に掛長（事務主任）ポストをつけること及び専門職員の学科、教室事務への導入を要望書の提出を含め一貫して要求し続けた。特に95年12月には、文部省が人事院に学科、教室事務の専門職員新設を96年度の要求事項としてあげていることを示し、この問題についての積極的な取り組みを要望した。研究科長は現状のままでポスト増という理職の要求に理解を示した（96年2月）。

### 〈技術職員〉

理職は94年度の教室系技術職員の6級昇格に関し、実現1名というのは他部局に比べて悪いことを指摘し、理学部の見解を問うた（94年12月）。事務長は年令順で要求したことを明らかにし、号棒・年令順の昇格が妥当だという考えであると述べた（94年12月）。理職は飛び越し昇格問題の解消を訴えるとともに、技術官の業績を明らかにするために、教官の論文に研究協力者として名前を加えてもらうよう働きかけることを要望した（95年6月）。研究科長は技術官が関与した研究については謝辞または論文の共著者として載せるよう教授会で要請したと述べた（95年7月）。95年12月、高位号俸者3名の6

級昇格が実現し、ある程度の改善を見たことに理職は理学部の努力を多とした。理職は、93年（平成5年）より放置されてきた技術部組織の技術長をはじめ班長、主任の空きポストを全て埋めて組織の再編成を早急に行なうことを要望した（95年12月）。事務長は技術委員会の承認を得て行なうつもりだと答え（95年12月）、2月28日に技術委員会を開いて検討すると述べた（96年2月）。

### 〈図書職員〉

理職は、図書職員の処遇が劣悪であることを訴え（94年6、9月）、職務の専門性を重視した処遇改善を要求した（95年6、12月、96年1月）。事務長は職員を組織化して主任、掛長、専門職員定数を要求したいと述べた（95年10月）。理職は、理学部図書館の建設が成った段階で組織化を行うべきだというのが理学部図書職員の総意であると述べた（96年2月）。

### 〈行（二）用務員の3級昇格〉

理職は、行（二）用務員の3級昇格実現を94年11月以降ほぼ毎回の交渉で訴えた。事務長は職務内容に付加業務を加えて上申したと述べ（95年3月）、努力していると答えた（95年9月）。

## 2. 技術職員の助手振替問題

教養学部には貸していた定数が漸次助手定数として理学部に返還され、それに技術職員定数を振替えていることについて、理職は技術職員定数の削減に結びつくため中止を要求した（95年3、11月）。事務長は、それは無理だが振替後に退職した助手定数は継続的に技術官業務の助手として使うことを明文化すると約束した（95年11月）。

## 3. 中途採用者不利益解消

理職は、民間からの異動のため処遇面で著しい不利益を被っている技術職員の不利益解消について、研究科長に対し総長裁定による昇格を求める要望書を総長宛に出すことを要求した（94年6月）。研究科長は10月に要望書を渡したことを明らかにした（94年11月）が、任期中に成果のなかったことに遺憾の意を表した（95年3月）。理職は当該職員が在級年数を満たしてしまう96年4月以前の4級昇格を毎回の交渉で要求し、研究科長も努力すると回答した。

## 4. 行（二）から行（一）への振替について

理職は、行（一）の業務を行なっているながら行（二）に据え置かれている職員について、行（一）への早急な振替を要求してきた。事務長は、84年以前採用者の振替問題が解決すれば進展するのではないかとの見通しを述べた（94年4月）。理職は要望書を提出し、年度中の振替を強く要望した（94年6月）。95年4月、85年以降採用者の振替が1名実現したことから、理職は問題解決に有利な事実と捉え、早期実現を毎回の交渉で訴えた。これに対し研究

科長は、人事課に働きかける等努力していると回答した。

## 5. 生物化学科の職員補充問題

94年4月以降の理学部における中途退職者2名の定数がいずれも生物化学科に補充されなかったことについて、理職は強い不満を表明し、全力を尽くして早期解決することを要望した(94年6月)。これを受けて研究科長は、人事委員会と教授会で生物化学科に定員1名が補充されることが了承されたと述べ(94年9月)、95年4月1日付で1名の事務職員が生物化学科に配属された。

## 6. 教室系技術職員の専行職移行問題について

理職は専行職移行実現を目指し、9大学理学部長宛に早期実現を要請する文書を送付したことを伝えた(94年5月)。研究科長は9大学理学部長会議の席で東大に同調してほしい旨訴えたと述べた(94年5月)。理職は国大協からの専行職移行問題に関するアンケートの回答に理職の意見を反映させるよう要望し(94年7月)、研究科長は要求を入れた回答をした旨述べた(94年9月)。理職は研究科長に全員移行、専行職4級定数の多数確保、柏キャンパスを想定した定数の確保、の3点を提言した「技術職員の専行職移行に関する理学部職員組合の提言」を提出した(95年9月)。研究科長は同提言に同感の意を示した(95年9月)。理職は、上位級定数を多く取るため専行職移行前に6級在級者を技術長、5級在級者を班長、4級在級者を主任に昇格させることを求める要望書を提出した(95年12月)。事務長は理学部技術委員会に諮って決めると答えた(95年12月)。

## 7. 職員の所属及び身分証明書について

93年度に実現しなかった職員の理学系研究科移行について、研究科長は94年度、95年度と概算要求すると述べた(94年4月、95年1月)。95年4月1日付で職員の所属が理学部・理学系研究科になったという辞令が総長名で交付されたが、事務長はこれは運用で行なわれたと説明した(95年4月)。95年5月末に配られた職員の身分証明書の所属は学部になっていたため、理職は辞令に一致させるよう要求し(95年6月)、96年2月、辞令と一致した身分証明書が再交付された。

## 8. 定員削減問題

理職は、削減による職員の減少を非常勤職員で補おうとする発想は過去における大規模な定員外職員の定員化問題が繰り返されることが予測され、大学職員全体の賃金を低く抑えられる事態につながる危険性をはらむことを指摘した(94年9、10月)。理職は、機会をとらえて定員削減問題について訴えること及び削減を退け必要人員の確保へ取り組むことを求めた(94年11、12月、95年1月)。研究科長は定員増は大学問題における最も大きな合意事項であるはずだと答えた(95年12月)。理職は、昭和40年の第1次定員削減より第8次までの30年間で技術職員定数は半分に減っていることを指摘、第8次定員

削減に対する理学部の方針を質した(95年7月)。研究科長は定年退職者を定削にあてる方針であると答えた(95年7月)。理職は96年度は定年退職者だけでは削減割当をこなせない深刻な事態であり、教授会は真剣に対応策を考えるべきだと訴え、研究科長は理学部の方針に関して検討することを約束した(95年7月)。

## 9. 教員の任期制導入について

理職は、95年9月18日に文部省大学審議会が出した中間報告「組織運営部会における審議の概要—大学教員の任期制について—」に対し、教員への任期制導入に反対を表明するとともに、理学部の見解を質した(95年12月、96年2月)。研究科長は学部として議論はまだ行っていないと答えた(96年2月)。

## 10. 新1号館建設問題

理職は新1号館建設後の十分な書記局スペースの確保を要求し(95年7、10月)、研究科長は現在の2倍程度の面積で2部屋分を確保すると約束した(95年10月)。

理職は新1号館建設にともなう理学部図書館建設計画について、建物、組織の検討はどこで行なわれるのかを尋ねた(94年7月)。研究科長は図書委員会の下部組織である理学部図書館設立準備委員会(平成4年発足決定)をスタートさせそこで検討すると回答した(94年7月)が、後に図書委員会が適当であると述べた(94年11月)。理職は図書館設立には職員の組織機構が必要でありそれは概算要求事項であることを指摘し(94年11月)、処遇改善に結びつく職員組織編成を要望した(94年10、11月)。研究科長は努力すると答えた(94年10月)。

## 11. 柏キャンパス計画について

94年3月からほぼ毎回の交渉で、理職は柏キャンパス計画について質すとともに、柏に本郷から職員を充てることと安易なパート、ボランティア導入には反対であると主張した(95年3月)。研究科長は本郷の人員を減らすことには反対を表明していると述べた(95年3月)。

## 12. 地震、災害対策について

理職は、阪神大震災を契機に理学部の災害対策を早急に整備するようを要求した(95年2月)。研究科長は整備を始めていると答えた(95年2月)。

## 13. 組合活動における慣習尊重について

95年7月7日、理職の恒例行事である1号館前の七夕飾りを事務当局が撤去したことに対し、理職は強く講義するとともに、組合活動における慣習を尊重すること及び問題が生じた場合は必ず交渉の場で話合うことを求めた(95年7、9月)。研究科長はこれを承認した(95年7、9月)。

# 人事異動報告

(講師以上)

所 属	官 職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
地球惑星	助教授	和 方 吉 信	7.4.1	採 用	東海大助教授より
植 物	〃	高 橋 正 征	〃	昇 任	教養学部教授へ
生物科学	教 授	加 藤 雅 啓	〃	〃	植物園助教授より
〃	〃	雨 宮 昭 南	〃	〃	臨海助教授より
〃	〃	田 嶋 文 生	〃	〃	遺伝学研究所助教授より
〃	助教授	真行寺 千佳子	〃	〃	動物助手より
臨 海	〃	岡 良 雄	〃	〃	動物助手より
物 理	教 授	十 倉 好 紀	〃	配 置 換	工学部教授へ
〃	〃	柳 田 勉	〃	〃	東北大教授より
化 学	〃	中 村 栄 一	〃	〃	東工大教授より
地球惑星	助教授	栗 田 敬	〃	転 任	筑波大助教授より
生物科学	教 授	新 井 良 一	〃	〃	科博研究室長より
〃	助教授	野 崎 久 義	〃	〃	環境庁環境研主任研究官より
鉱 物	〃	村 上 隆	〃	〃	愛媛大助教授より
地 理	〃	茅 根 創	〃	〃	通産省地質調査所主任研究官より
物 理	〃	酒 井 英 行	7.4.16	昇 任	助教授より
〃	〃	牧 島 一 夫	〃	〃	〃
天 文	助教授	尾 中 敬	〃	〃	助手より
生物化学	講 師	名 川 文 清	〃	〃	岡崎国立共同研究機構助手より
情報科学 (流動講座)	助教授	中 島 浩	7.4.1	併 任	本務：京都大学
( 〃 文 )	教 授	宮 本 昌 典	〃	〃	本務：国立天文台
( 〃 )	〃	安 藤 裕 康	〃	〃	〃
( 〃 )	〃	鱸 目 信 三	〃	〃	〃
( 〃 )	〃	井 上 充	〃	〃	〃
( 〃 )	助教授	柴 田 一 成	〃	〃	〃
地球惑星 ( 〃 )	〃	山 本 達 人	〃	〃	本務：宇宙科学研究所
生物科学 ( 〃 )	教 授	大日方 昂	〃	〃	本務：千葉大学
( 〃 )	〃	杉 浦 昌 弘	〃	〃	本務：名古屋大学
( 〃 )	〃	武 田 正 倫	〃	連携併任	本務：国立科学博物館
( 〃 )	〃	柏 谷 博 之	〃	〃	〃
( 〃 )	〃	馬 場 悠 男	〃	〃	〃
( 〃 )	助教授	松 浦 啓 一	〃	〃	〃
( 〃 )	〃	樋 口 正 信	〃	〃	〃
( 〃 )	〃	加 瀬 友 喜	〃	〃	〃

所 属	官 職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
鈹 物 (流動講座)	教 授	大 隅 一 政	7.4.1	併 任	本務：高エネルギー物理学研究所
地 理 ( 〃 )	〃	福 田 正 己	〃	〃	本務：北海道大学
生物科学	客 員 教 授	鈴 木 隆 雄	〃	〃	本務：都老人研究所
〃	客 員 助 教 授	西 田 治 文	〃	〃	本務：国際武道大
中 間 子	〃	瀧 川 仁	〃	〃	本務：IBM T・J ワトソンリサーチセンター
情報科学 (学際理学)	教 授	小 山 照 夫	〃	〃	本務：学術情報センター
物 理 ( 〃 )	助 教 授	満 田 和 久	〃	〃	本務：宇宙科学研究所
( 〃 )	教 授	小川原 嘉 明	〃	〃	〃
( 〃 )	〃	長 瀬 文 昭	〃	〃	〃
( 〃 )	〃	河 島 信 樹	〃	〃	〃
( 〃 )	〃	横 谷 馨	〃	〃	本務：高エネルギー物理学研究所
天 文 ( 〃 )	〃	井 上 一	〃	〃	本務：宇宙科学研究所
( 〃 )	〃	奥 田 治 之	〃	〃	〃
地球惑星 ( 〃 )	〃	鶴 田 浩一郎	〃	〃	〃
( 〃 )	〃	水 谷 仁	〃	〃	〃
( 〃 )	〃	西 田 篤 弘	〃	〃	〃
( 〃 )	〃	向 井 利 典	〃	〃	〃
化 学 ( 〃 )	〃	市 川 行 和	〃	〃	〃
( 〃 )	助 教 授	柳 下 明	〃	〃	本務：高エネルギー物理学研究所
鈹 物 ( 〃 )	〃	藤 原 顕	〃	〃	本務：宇宙科学研究所
物 理 (流動講座)	教 授	青 本 和 彦	7.5.1	〃	本務：名古屋大学
地 質 ( 〃 )	〃	河 村 雄 行	〃	〃	本務：東京工業大学
物 理 ( 〃 )	〃	大 谷 弘 之	〃	〃	〃
植 物 園	助 教 授	邑 田 仁	7.6.1	〃	講師より
地 殻	〃	金 沢 敏 彦	〃	〃	地震研教授へ
植 物 園	助 教 授	邑 田 仁	7.6.30	辞 職	都立大教授へ
情 報	教 授	辻 井 潤 一	7.7.1	採 用	
化 学	助 教 授	井 本 英 夫	7.7.16	昇 任	講師より
地 殻	教 授	野 津 憲 治	7.8.1	〃	助教授より
生物科学	教 授	木 村 賛	7.10.1	配 置 換	京都大教授より
〃	〃	近 藤 矩 朗	〃	転 任	環境庁国立環境研総合研究官より
物 理	助 教 授	相 原 博 昭	〃	採 用	UCLA ローレンスバークレー研助教授より
生物科学	〃	西 田 生 郎	〃	昇 任	岡崎国立共同研究機構助手より
〃	講 師	上 島 励	〃	〃	筑波大助手より
情 報	教 授	平 木 敬	7.10.16	〃	助教授より
植 物 園	〃	福 田 裕 穂	7.10.16	配 置 換	東北大教授より

所 属	官 職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
生物科学 (共通流動講座)	教 授	藤 島 正 博	7.10.1	併 任	本務：山口大教授
( 〃 )	〃	重 井 陸 夫	〃	〃	本務：京都工芸繊維大教授
( 〃 )	〃	日 詰 雅 博	〃	〃	本務：愛媛大教授
( 〃 )	助教授	山 根 正 氣	〃	〃	本務：鹿児島大助教授
中 間 子	併 任 教 授	橋 本 治	7.11.1	転 任	東北大より
地 殻	助教授	五十嵐 丈 二	〃	〃	広島大助教授より
情 報	教 授	萩 谷 昌 己	7.11.16	昇 任	助教授より
生物化学	〃	深 田 吉 孝	7.11.16	〃	教養学部助教授より
生物科学	助教授	藤 原 晴 彦	7.12.16	〃	講師より
地殻化学	〃	中 井 俊 一	〃	〃	助手より
化 学	講 師	澤 村 正 也	8.2.16	〃	〃

## (職 員)

所 属	官 職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
事 務 部	事 務 長	柚 原 義 久	7.4.1	転 任	静岡大学庶務部庶務課長より
〃	専門職員	山 田 喜 朗	〃	配 置 換	海洋研究所総務課庶務掛長より
〃	庶務掛長	奥 抜 義 弘	〃	転 任	統計数理研究所管理部庶務課人事係長より
〃	図書掛長	小 山 修 美	〃	配 置 換	附属図書館情報管理課図書受入掛長より
〃	教務掛長	宇都宮 栄 次	〃	昇 任	教養学部・数理化学研究科教務課前期課程第一総務主任より
〃	司計掛長	柳 澤 知治郎	〃	配 置 換	工学部経理課経理掛長より
物 理	事務主任	小石沢 昭 子	〃	〃	教育学部用度掛長より
生物科学	事務室主任	津 田 敦 子	〃	昇 任	教養学部・数理化学研究科教室事掛より
事 務 部	事 務 官	高 山 和 男	〃	配 置 換	社会科学研究所会計掛より
化 学	〃	池 松 瑞 穂	〃	転 任	国立婦人教育会館情報交流課より
生物学科	〃	吉 田 健 彦	〃	〃	国立科学博物館教育部企画課より
事 務 部	〃	菅 原 教 宏	〃	採 用	
情 報	〃	東 方 智 洋	〃	〃	
物 理	〃	青 木 秀 夫	〃	〃	
化 学	〃	渡 邊 涼 子	〃	〃	
生物化学	〃	草 島 葉 子	〃	〃	
生物科学	〃	加 藤 順 子	〃	〃	
事 務 部	〃	川 口 司	7.5.1	転 任	東北大学理学部へ
地 惑	〃	太 幡 恵 美	7.8.6	辞 職	
事 務 部	〃	川 田 耕 二	7.10.1	採 用	
生物科学	〃	加 藤 順 子	7.10.6	辞 職	
〃	技 官	大 河 史 彦	7.10.6	転 任	国文学研究所管理部会計課へ
〃	〃	古 江 亮 司	〃	配 置 換	施設部建築課より
物 理	事 務 官	小 松 陽 一	7.12.1	転 任	東京国立博物館資料部へ
〃	〃	加 藤 喜 子	8.1.1	配 置 換	農学部より
事 務 部	大学院掛総務企画主任	小野塚 朗	〃	昇 任	医学部附属病院総務課附属学校掛長へ
〃	事 務 官	遠 藤 健 三	〃	転 任	総合研究大学院大学学務課より
〃	技 官	長谷川 洋	8.2.13	辞 職	

## 名誉教授との懇談会

去る11月17日(金)午後5時から、赤門脇の学士会館において、平成7年度の理学部名誉教授懇談会が開かれ、名誉教授の125人のうち42人の方々が出席され、学内からは吉川総長に出席いただき、理学部から益田理学部長をはじめ評議員等関係者が出席した。

懇談会は柚原事務長の開会に始まり、益田学部長から挨拶と近況報告が行われた後、全員で記念撮影を行い、続いて吉川総長の挨拶、最長老の彌永昌吉名誉教授のご発声による乾杯で懇談に入った。

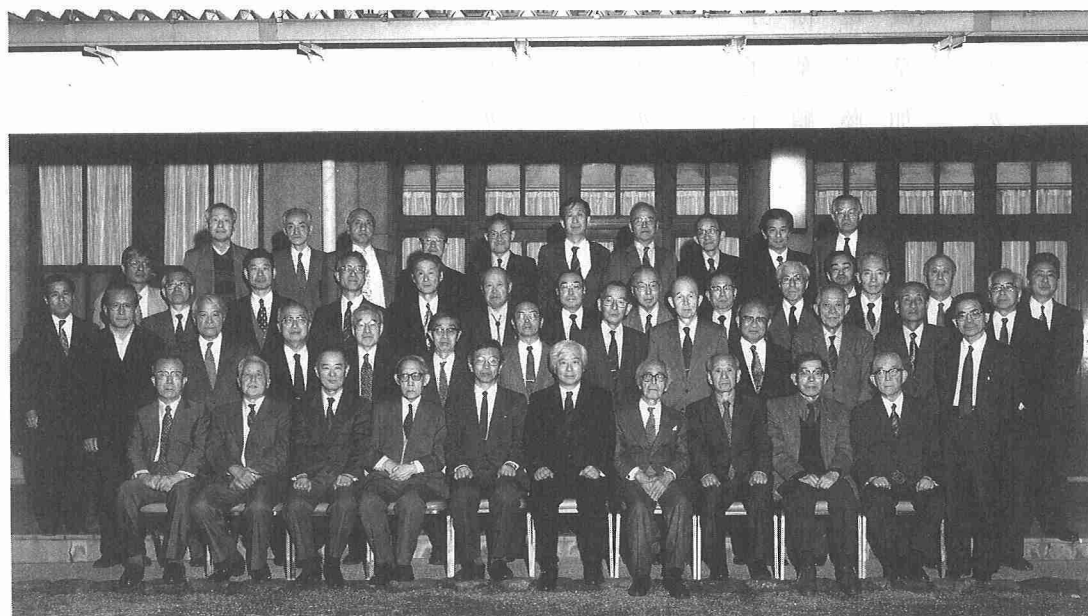
懇談は、各先生方のご活躍の様子や、ユーモラスな思  
い出話し、近況報告などがあり、終始なごやかな雰囲気  
に包まれた。

また、情報科学専攻の辻井潤一教授による「言葉と計算機」と題する講演がO.H.P.を使って行われ、名誉教授の先生から活発な質疑応答があった。

最後に益田学部長の挨拶があって盛会のもとに終了した。

[illegible]

東京大学理学部名誉教授懇談会  
平成7年11月17日 於・学士会分館



理学部名誉教授懇談会 平成7年11月17日 於・学士会分館